Absurd（アブソード）

freeman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｂｓｕｒｄ（アブソード）

【Ｎコード】
Ｎ９８６２Ｚ

【作者名】
ｆｒｅｅｍａｎ

【あらすじ】
２０２０年、アメリカ合衆国政府の公式発表により、それまでの科学的な法則、一般常識を全く無視した“力”の存在が明るみにされ、世界中を震撼させた。
８年後の２０２８年、合衆国は同盟国日本へ一人の“力”を有する少年を派遣する。

第一話：ダイビング

―２０２８年８月１８日、現地時間２３：２１―サウジアラビア西部、メッカ上空２１０００メール―

「・・・大丈夫なのか。」

軍事輸送機の窓から暗闇に染まった空を見下ろしながら一人の少年が呟く。

『どうした、ここにきて自信がなくなったのか。』

耳に当てていた通信から英語で散々聞き慣れた男の声が聞こえてくる。

「いえ・・・ただ高い所があまり好きじゃないだけです。」

『高さなんてお前にはさほど問題ないだろ。』

「こういうのは気持ちの問題なんですよ。」

『気持ちの問題か・・・まぁお前ならこの程度は造作もないさ。』

「簡単に言わないで下さいよ。第一、なんでこんな雑用がオレのところに回ってくるんです？空軍の連中に任せておけばよくないですか。」

『開発部門の連中がお前の戦闘データが少なすぎるとうるさくてな。』

「・・・それって開発部門というよりまたあの女一人の我侭って言うんじゃないですか。」

『こればかりは仕方がない。確かに実際の戦闘で得られるデータがお前の場合ほとんどないからな。それほどお前の力があの女にとって魅力的なんだろ。』

そのためにわざわざサウジアラビアまで連れて来られたこっちの身にもなってほしい。

「・・・どうでもいいですよ。そんなことより、たまには休暇をください。ここ最近ずっと本部で実験データの収集につき合わされていたんで心身ともに参っているんですよ。」

『ジャストタイミングだ、喜べ。次の任務は半分休暇みたいなもの

だ。楽しみにしておけ。』
「・・・はぁ」
あまり期待しないでおこう。
『そろそろポイントに着く頃だな。では健闘を祈る。』
ピッ　通信が切れた。
「はぁ」
思わずため息がもれた。
「まもなくポイントに到着します。降下の準備をお願いします。」
同乗してしていた乗組員から指示が出た。
「・・・分かった。」

ーアメリカ合衆国、ペンシルベニア州、フィラデルフィアー
合衆国の政治を司るワシントンＤ・Ｃと世界経済の中心であるニューヨークとの中間に位置しているこの都市の地下一帯に『Ｓｙｓｔｅｍ　Ｏｆ　Ａｂｓｕｒｄ　Ｓｔｒａｔｅｇｙ（アブソード戦略機関）』通称：ＳＯＡＳ（ソアス）のアメリカ本部は置かれている。その司令室で先程少年と会話していた男、ウィリアム・ローランドは通信を切ると目の前の大型モニターに目を向ける。身長は１８０センチ半ば程で短髪、年齢は見た感じで４０代前半の白人である。制服を着ていてもその体が洗練された肉体であることが見てわかる。そして、そこにあるべき彼の左腕は二の腕から下がない。その姿から幾つもの死線をくぐり抜けたてきた貫禄を感じさせる。
「あの、局長。」
すると近くでキーボード操作をしていた若い一人の女性オペレータが作業の手を止めてたずねてくる。
「ん？何がだ？」
「メッカに潜伏している『カルトディア』が我が国の軍の“レプリ

カ”を所持していることを“彼”に報告しなくてよろしかったのですか？」
「もうすぐ決行時間だ。これから起こることを見ていたらわかる。」
ウィリアムは平然と言った。
女性オペレータは「？」と首をかしげるばかりだった。

―２３：３０―
先程までウィリアムと通信で会話していた少年、雅式（みやびしき）は現在、輸送機の後方ハッチの前に立っている。すると、彼の後ろにいる先程の乗組員が声を発した。
「後方ハッチ開きます！」
次第に少しずつハッチが開き始め、それに伴って強風が機内の中に吹き荒れる。思わず乗組員は近くの壁に捕まっている。そんな中、ハッチのすぐ近くにいる式は少し長めの黒髪を揺らしながら平然と突っ立ている。
「パ、パラシュートの装着は？」
必死に壁に掴まりながが乗組員がたずねてくる。
「あぁ、パラシュートね、必要ないよ。」
そっけなく返答するとそのまま大空へ身を投げた。
真っ暗で先が見えない空はまるで闇のようだ。落下速度が増していくにつれ、闇がものすごい速さで迫って来るような感覚になる。
この闇のような空の下にいるテロリスト達は何にも気づかずに死を迎える。
それが闇から出でてくるたった一人の子供によってもたらされることにも気づかずに。
（まぁそんなことはどうでもいい。）
先程のウィリアムとの会話で高いところが苦手などと言ったが、あ

れは適当な誤魔化しで言った。
（たぶん当人にはバレてるだろうがな。）
あれは自分がこれらか行う“奇襲”によって、イスラム教の第一聖地である場所の一部を壊滅させておいて政府は作戦の成功を発表するとき、一体どんな言い訳を世界中のイスラム教徒に用意しているのだろうと気になって呟いた言葉だった。

第二話：後日談

「――アメリカ政府によりますと、サウジアラビア西部、メッカに潜伏していたイスラム系テロリスト集団『カルトディア』への直接攻撃を決行し、殲滅に成功したとの発表がありました。この作戦によりカルトディアの潜伏先を中心とした半径５キロメートル以内の建物や地形が”消失”し、民間人の死傷者６５０人以上という被害が出たことについてサウジアラビアを中心としたイスラム系国家から批判の声が出ていますが、これに対してアメリカ政府は『カルトディアによるテロ行為を最小限の被害で未然に防いだ。』とのコメントを出しています。なお、――」

「・・・無茶苦茶だな。」

―８月１９日現地時間１４：３６フィアデルフィアの自宅―

例の作戦が終わって、すぐに輸送機で回収され、帰宅してソファーもたれながらテレビとつけてみると自分が２２時間ほど前に行った“雑用”がニュース番組で報道されていた。

気になっていた政府の弁解はいかにも“平和のために尽力した”というアメリカらしいものだった。

「まぁ真実を伝えるわけにはいかないよな。」

そもそも国外ので起きるテロ行為をわざわざ止めに行ってもアメリカには何の利益もない。せいぜい現地の国に貸しを作ることができるくらいである。

だが今回の場合はサウジアラビア政府に無断で行なったあげく、イスラムの聖地に被害を及ぼして世界中のイスラム教徒の反感まで買ってしまうというリスクを負ってまでこの作戦を決行した。

（おそらくこの作戦の本当の目的は・・・・）

そんなことを考えていたらテーブルに置いていたスマートフォンが振動する。手に取って発信者を確認して耳にあてると

『任務ご苦労だったな。』

サオス・アメリカ本部局長、ウィリアム・ローランドからだ。
「敵が“レプリカ”を所持してたなんて聞いてませんでしたよ。しかもあのレプリカ、うちの国の軍用モデルですよね？今回の任務の目的って“そういうこと”だったんですか。」
『その言い様だともうすでに察しはついているだろ。』
「・・・えぇ、まぁ。」
（アメリカ軍のレプリカがテロリストの手に渡ってしまったという失態を世界中に露見させないために全ての証拠を“消すために”オレが駆り出されたんだろ。要するにオレは尻拭いをさせられたわけか。けどなんで・・・）
『なぜ軍のレプリカがヤツらの手に渡ったのか引っかかるだろ。』
まるでオレの心の中を読んでいたかのように局長が言う。この男はたまに相手の心を先読みするような発言をするから、“そんなアブソード”でも持っているんじゃないかとたまに思ってしまう。
「・・・興味ありません。オレには関係ありませんから。それより、なんで実戦データの収集が目的だなんて嘘ついたんですか。」
『確かに最重要事項は証拠の隠滅だったが、お前のデータ収集も目的の一つだったぞ。お前のアブソートを見て若いオペレーターが呆然としていたから思わず笑ってしまったぞ。これで“あの女”も多少は満足するだろ。』
「・・・だといいんですけどね。」
（アイツの欲深さは底知れないからな。）
『ところで話は変わるが２１日の午前９時に本部に出向いてくれないか。』
「前言ってた次の任務のことですか？」
『そうだ。楽しみにしておけ。』
（いや、あんたからそんなこと言われたら逆に楽しみにできねぇよ。）
「・・・楽しみにしています。」

局長との通話を終えてソファに横になっていると眠気が襲ってくる。
時差ぼけの影響だろうか。
「今日は休みだからゆっくりと寝るか。」
そのまま眠りに落ちた。

「ん・・・んぐっ」
いきなり息が苦しくなって目を覚ます。すると目の前にはよく知る顔があった。そいつはオレの唇を自分の唇で塞いでいる。
「あっ、起きちゃった？」
名残惜しそうに唇を離すとオレの首に腕を絡ませて耳元で囁く。
「おかえり、お兄ちゃん。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9862z/

Absurd（アブソード）

2012年1月1日01時46分発行